どが居並び、その側には足輕四人が控へた。村人は呼び出され、科によつて腰縄手錠で宿役人の中へ預けられ、老年で七十歳以上のものは、手錠を免ぜられた。既に死亡したものは、「お叱」といふだけで特別の憐憫が加へられた。

東北漫歩

（岩手縣之卷）

和泉生

今は昔の面影さへ止めぬ靑森、岩手兩縣界を連絡する堅牢靑岩橋は、國道橋であるに拘らず、牛馬の通行さへ危險視された假橋であつた。國有鐵道や地勢の關係上、架橋位置の選定には、當時其の衝に在つた三浦七郎氏も、人知れず苦心された樣だ。昭和九年、直轄工事として十六萬八千圓を奮發し、東北本線の鐵道橋と併行して竣功したのであるが、此處を汽車で横過する時は、愈々岩手縣へ入るなあと氣が附く。續いて約四粁を、昭和十、十一兩年度に於て延長七十三米の府金橋と、九十二米の長瀬橋とが永久構造化したので、此の地方に於ける交通の變遷が一際目立つが、四號國道中の大難所中山峠を突破し、沼宮內町を經由して盛岡市に達するには、前途尙遼遠の感が深い。中山峠附近は、國有鐵道との平面交叉の數に於ては、恐らく日本一であらう。從つて自動車で旅する者には、恐怖地帶であり、不安區域である。隧道直前十米が跡切道では、運轉手の神經が戰慄するのも無理からぬことだ。是が改良工事の至難は、夙に天下の認むる所であるが、一日も早く此の交通癌が除却され、明朗交通の訪れを心から祈りたい。

上古、アイヌ族が居住したことが確證される福岡町、一戸町間に浪打峠がある。人口に膾炙する古歌「波てさぬ」

は、此の地を詠んだものだと謂ふ。嶺北の坂路を數町下ると清水がある。明治九年、天皇御野立遊ばされた際、此の清水を汲みて、御憩ひの所に奉れる翁があつた。其の桶に添へたる歌が「足曳の山した水を汲みあげてわが大君に御茶奉る」であるが、高燥絶塵の境として奥床しい。

街道時代の重要宿場であつた沼宮内町地内の國道も、昭和十年度農村其他應急及昭和十一年度災害地方應急の兩事業に依つて、コンクリート鋪裝となつてゐる。町長柴田兵一郎氏の盡力の結晶であらう、柴田氏は、道路改良論者では、當縣の第一人者として押しも押されもすまい。先般、貴族院議員に當選した榮譽も、彼の平素の功績を物語つて一段の輝きを添へ、今後の飛躍を意義あらしめるであらう。

珍物金勢様を安置する卷堀村を越すと、荒廢した小村が見える。澁民村と言ふ、彼の天才、石川啄木の故郷である。人類にとつて故郷ほど懐しく戀しいものはないであらう。喩へ、虐げられた故郷にしろ、父も母も亡い故郷にしろ、やはり故郷の夢は美しく清く、春の花にも、秋の夜の雨にも、浮ぶは故郷の幻である。啄木の澁民村を思ふ心は

かにかくに澁民村は戀しかり
おもひでの山
おもひでの川

母君の泣くを見ぬ日は
われひとり
ひそかに泣きし故郷の夏

田も畑も賣りて酒のみ
ほろびゆくふるさと人に
心寄する日

百姓の多くは酒をやめしといふ
もつと困らば

何をやめるらむ

馬鈴薯のうす紫の花に降る
雨を思へり
都の雨に

情熱に燃ゆる啄木が、文化の一閃だも屆かぬ東北の一寒村から、大都會の文壇に登場せんと焦つた苦い涙の苦鬪史は、彼の小說集或は詩集によつても明かであるが、彼が小說を書く自信を得たのは、明治三十九年、澁民村寶德寺の後燈問題で上京し、與謝野寛氏の家に居候して、新刊の小說を讀破する機會を與へられた二十一歲の初夏である。

野心滿々として歸鄉し、不眠不休で長篇「面影」を脫稿し、在京の小山內薰氏に其の周旋方を依賴した。彼は「面影」の稿料で、兄に對する借金の不義理を償ひ、友人との祝盃を確信してゐたが、かほどまでに待ち焦れてゐた彼に、小山內氏から屆けられたものは稿料ではなくて、汗みどろで書き上げた「面影」の原稿であつた。當時の落膽と悲嘆は、彼の自叙傳的小說「足跡」に伺ふことが出來る。

啄木が、明治四十年十一月「東京每日新聞」へ連載した長篇「鳥影」こそは、小說家としての啄木が、新聞小說として世に問ふた唯一のものであり、其の稿料に依つて、當時窮乏の彼が、經濟的には或程度惠まれたのは事實らしい。其の後、自分の過去の一切合切を總決算する意氣込で執筆したのが「足跡」であるが、自然主義全盛期の當時、文壇の花形だつた中村星湖氏に、「早稻田文學」の「小說月評」で、次の樣な一擊の痛手を受け、强い自負心を失つてしまつたと、吉田孤羊氏が記してゐる。

これは長篇の書きだしださうだから、作者に對する禮として何も言はない方がよかろうが、讀んだから思ひ付いた所だけを言つて置く。誇大妄想狂式の主人公を書くのは好い、作者まで一緒になつては堪らない。新しい作家らしい態度を見ると、杢太郎や晶子女史の方がずつと進んでゐる。

晩年の作「我等の一團と彼」は、啄木の生前遂に何處にも發見されなかつたが、土岐善麿氏の好意に依つて、大正元年八月讀賣新聞に發表され、多數の作品中最も高評附けられただけに、若き天才の夭逝が限りなく惜まれる。

啄木が鄕里に在りし時、好んで逍遙した村外れの國道脇には、

やはらかに柳あをめる
北上の岸邊目に見ゆ
泣けとごとくに

の歌碑が建つてゐる。彼のロマンチシズム時代と、自然主義時代とを偲ぶ好記念塔であり、あの山から、あの森から、そして此の小徑、此の小川から幾多の詩が湧き、小說が生れたのだと思ふ時、麗しい追憶の夢に心が醉ふ、彼をして尙十年、その文才を存分揮はしめたかつたとの思遣りは、彼の薄命の靈魂に捧げる百萬人の敬虔な合掌であらう。

右に厨川柵趾、左に源義家の陣營たりし八幡森を眺めて北上川に沿へば、名顏瀨橋がある。源義家の征討に刀折れ力竭きた貞任が、夕顏を頭とする幾百の藁人形を造り、之に甲冑を纏はしめて防戰したるに因り、此の名ありと傳ふ。昭和十二年度より、四十三萬圓を以てこれが完成を急いでゐるが、時局柄仲々捗取らない、直轄の立看板の手前もあり且都市交通の重要性に鑑み、大いに頑張つて貰ひたい。

盛岡市は靜かな街だ。南部馬と南部鐵しか知らない人には、啄木の「葬列」に出て來る盛岡市には、訝りの眼を瞠るであらうが、私は何の抗議をも試みず其の一節を揭げよう。

遠く岩手、姫神、南昌、早池峰の四峰を繞らして、近くは、月に名ある鑪山、黃牛の背に似た岩山、杉の木立の色鮮かな愛宕山を控へ、河鹿鳴くなる中津川の淺瀨に跨り、水音緩き北上の流に臨み、貞任の昔偲ばるる夕顏瀨橋、靑銅の擬寶珠の古色滴る許りなる上下二橋、杉土堤の夕暮紅の如き明治橋の眺めもよく、若しそれ市の中央に巍然として立つ不來方城に登つて瞰下せば、高き低

き茅葺柾葺の屋根々々が、茂れる樹々の葉蔭に立ち並んで見える此盛岡は、實に誰が見ても美しい日本の都會の一つには洩れぬ。誰やらが初めて此の市に遊んで「杜陵は東北の京都なり」と、言つたことがあるそうな。「東北の京都」と近代的な言葉で言へば餘り感心しないが、自分は「みちのくの平安城」と風雅な呼方をするのを好む。も一つ思ひ出の盛岡としての一節を借りてみよう。

或るうら若き美しい人の、潤める星の樣な双眸の底に、初めて人生の曙の光が動いて居ると氣が附いてから、遽かに夜も晝も香はしい夢を見る人となつて、且暮「若菜集」や「暮笛集」を懷にしては、程近い田甫の中にある小さい寺の、巨きい栗樹の下の墓地へ行つて、青草に埋れた石塔に腰打掛けて一人泣いたり、學校へ行つても、倫理の講堂で竊と「亂れ髪」を出して讀んだりした時代のことや、すべて慕かしい過去の追想の多くは、皆この中津河畔の美しい市を舞臺に取つてゐる。盛岡は實に自分の第二の故郷なんだ。「美しい追憶の都」なんだ。

こゝら邊りも、昔は黃金の花が咲いたそうな。京都の文化を平泉に輸入した「金賣吉次」の記事が、保元物語や大和物語に表れてゐることや、「からめぶし」に、「いなかなれども、南部の國は西も東もかねの山、ハアドツコイ〳〵〳〵ナ、どつしりほりだせ、お國の名物」と唄つてゐるから、滿更嘘でもなからう。自動車を馳れば三十分で行く繋温泉は、深山の雰圍氣に浸れて悠り休めるのが嬉しい。前九年之役に發見したと言ふから歴史は相當古い。原敬の誕生地とも聞く。

盛岡市花卷町間三十五粁の改築鋪裝は。昭和九、十、十一年度に於て五十九萬圓を要し、約二十一粁を完成したのであるが、政府豫算の都合により、昭和十二年度以降休工狀態にあるのは遺憾である、然し、これが促進運動に對する地元民の熱と力は、遠からず實現の歡喜を齎すことゝ信ずる。

東北地方に於ける無數の溫泉中、設備の雄を唄はれる花卷溫泉は、西北は萬壽山、羽山、小櫻山等の翠巒に抱擁せ

られ、淙々たる臺川の清流に臨み、更に東南は、北上の沃野田園眼下に展開し、遙に北上連峰を一眸の間に眺める雄大な風光は賞される。浴客の雜沓には些か魂消るが、こんな時には別莊地帶に逃避する方法もあるそうだ。此の雜沓を嫌ふ連中が、最近西北方の臺溫泉へ登り詰めるところを見ると、人の知らない佳さがありそうに思ふ。

花卷町地內の豐澤橋は、直轄國道改良工事が東北地方に呱々の聲を擧げた年の執行であり、黑澤尻町の九年橋は昭和七年度、金ケ崎町の再巡橋は昭和九年度の工事なるも、九年橋と言ひ、再巡橋と言ひ、共に其の歷史を語るに相應しい橋名である。

黑澤尻町の西南に當る相去村にある六原青年道場は、前文務次官石黑英彥氏が、岩手縣知事時代「本縣更生は青年岩手の建設にあり」との信條の下に、昭和七年九月二日誕生した。岩手縣立六原青年道場規程第一條に明示する如く「本道場ハ縣下青年男女ヲ訓育シテ專ラ信念ト實力トノ啓倍ニ努メ依テ祖先傳來ノ日本精神ヲ體現シ入リテハ地方風教ノ作興及地方產業ノ進展ニ盡シ出テハ新領土及海外ノ發展ヲ圖リ以テ本縣ノ振興ト皇國ノ興隆トニ貢獻スル地方中堅人物ヲ養成スルヲ目的トス」るのであるが、此の目的を達成する爲に、專ら道場生の敎養を掌る訓鍊部、農家經營の實際に關する硏究、模範農村の建設及道場生の指導を掌る模範農村部の外、造林、林用、林產、副業等試驗調査製作及道場生の指導を掌る林業部があつて、精神訓育は勿論、自給自足に必要なる知識の啓發、技術の修得に懸命である。本道場の修鍊生が、鄕土產業の振興、地方風敎の作興に貢獻するのみならず、遙か滿蒙開發の第一線に起ちて奮鬪しつゝあるの氣慨は、蓋し勇にして壯である。今や大陸の建設期を控へ、彼等の血は湧き肉は躍るであらう。

創立以來七年の六原精神は、遂に全縣下に普及し、官界、敎育界或は實業界等何れも淸き明るき心を胸に抱き、熱と力とを以て皇國の興隆に協戮邁往するの一心こそ、祖國日本の眞の姿であらう。

永承の頃、安部頼時の三男鳥海彌三郎宗任の居城であつ

た金ケ崎町には、今尙本丸、二ノ丸、三ノ丸の乾濠の跡を存し、膽澤川に沿ふ要害の地たりしことが頷ける。西へ八粁の千貫石貯水池は、伊達公產業に意を用ひ、荒蕪地開拓の爲築堤したるものであるが、經年久しきに依り、昭和六年縣に於て之が改增築を完了し、東北一の大貯水池として其の雄大を誇り、數ケ町村開拓の源泉たるは言ふまでもない。

「澤水滿巷故號此地曰水澤」と封內風土記にある水澤町は、人口僅に一萬三千人に過ぎないが、幕末の先覺者高野長英、大風呂敷と異名をとつた伯爵後藤新平及二・二六事件の尊き犧牲となつた子爵齋藤實の誕生地として、普く天下に知られ、水澤公園や吉小路に彼等の追想を求める旅人も尠くない。其の外、日本武尊御東征に緣しある國幣小社駒形神社や、伊達騷動の主役たりし原田甲斐の妻墓、或は萬國共同緯度觀測所等があつて縣內小邑の華であらう。

「山に富士みちのくにこの櫻かな」の墨染櫻と、「いつの間に花の筏にのりに來て漆の寺に駒ぞとゞめる」の靈桃寺觀音堂を持つ前澤町より、昭和六年度に於て六千三百八米の舊國道を附替へた終點が、東北一の史蹟地平泉村である。

此の地は、鎭守府將軍藤原秀衡朝臣父祖三代の治府として、九十年の榮華を誇りしだけに、一草一木にも其の面影を映し、北上川を隔てゝ展望する東稻山をはじめ、中尊寺、高館址（俗に判官館とも謂ふ）金色堂、辨慶堂等枚擧に遑なく、四季の風情と相俟つて觀光客の波は凄じい。

三代の榮耀、一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり、秀衡が跡は田野に成りて、金鷄山のみ形を殘す、先高館に登れば北上川南部より流るる大河也、衣川は泉ケ城をめぐりて、高館の下にて大河に落入、泰衡が舊跡は、衣ケ關を隔てゝ南部口をさし堅め、夷をふせぐと見えたり、偖も義臣すぐつて此城にこもり功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと笠打敷て時のうつるまで、泪を落し侍りぬ。

夏草や兵ものどもが夢の跡

これは「奧の細道」の一節であるが、此の句碑は、嘉祥

三年慈覺大師の開基せる毛越寺大泉池の南畔に在る。芭蕉の自筆を刻したものと傳ふ。

奥州平泉と言へば誰でも義經最後の地として興味が湧く。內外蒙古、中央亞細亞諸國を征服し、歐洲を震駭せしめた彼の成吉思汗（ヂンギスカン）が義經なりとの說は、英雄の儚き末路を哀れむ通性として、其の眞疑を確める必要もなからうが、上飯坂眞美氏編輯に成る「平泉舊跡巡り」の內の「高館」（古跡めぐり拔萃）によつて、そのかみを偲ぶとしよう。

（一）

有明の空に不如歸が啼く、短夜の明け離れんとする黎明頃、高館あたりは俄に物騷しくなつた、時は文治五年閏四月三十日。

常陸坊海尊ふと目を覺まし、中門の傍に走り出で見渡せば、こわ如何に物々しき軍兵が十重二十重と高館を取圍む、海尊大聲揚げ

「是はいづれの軍兵で、何用あつて斯くは騷しいぞ」といふ、侍大將と思しきもの馬を大門の下に寄せ

「判官殿御謀反の噂隱れもない、出羽陸奥押領使藤原朝臣泰衡勅令により、まつた鎌倉殿の仰を蒙り、此れまで推參致した斯く申す某は泰衡の御內人江刺小次郎信重でござる、判官殿には尋常に御自害あつて然るべきと存じまする。」

すは一大事起りたりけるよ、昨日まで夢更に知らざりしは一大不覺と海尊取敢へず辨慶以下の御內人を起し、月見御所に馳せて此由を判官に啓す、高館の騷ぎは一方ではない。（中略）

「殿斯うあらうとは武藏ちつとも存じませなんだ」一生の大不覺何とも御詫びの致しやうもございませぬ。秀衡殿卒去後一年ばかりは懸念な致しましたが、もうよかるべうと存じましたるは取返しのつかぬ誤り、武藏も年老いたるかと遺恨にござりまする。」

流石の辨慶齒をくひしばつて、大粒なる涙をぽつりぽつりと落す。判官ちつとも騷がず。

「天意であるぞ人間業の致す所ではない。そち達の不覺ではなうて義經の命數ぢや、今日は義經の運も窮りたるぞ。

義經生年三十一歲潔ぎよう此處で自害を致さう、賴みに致した陸奥平泉が斯うなつて義經もう落ち行く所はない。故秀衡ぬしの卒去が身の不幸又泉三郎は一昨日念珠の關へ發足したとやら、之れ亦身の不幸、いや、之は泰衡が遠ざけたる謀であらう。長らく汝達に憂身を見せたが義經の運の開けぬため、汝達までが我と同じく花咲かで萎み行くこと、まことに憐なことにある許してくりやれ。」北の方が抱ける兒に目をつけて

「おう其姫も不幸な兒であるわ、思へば靜の生みし男子は由井の濱に沈められたとやら、其兒も平泉で蕾のうちに散り行くのぢや、義經の子と生れたのがいづれも不仕合。後世はよい所に生れ變りてよい日の光を見や。北の方にもさま〳〵の憂苦勞して、此までおざつたに、果敢ないことになつて痛はしい、之も義經に連れ添ふたる身の不幸、あきらめられぬところをあきらめて給はれ。」

悠然として語る判官の辭にはいづれも腸をちぎる思ひであつた。北の方は固より辨慶、兼房も一言も發し得ぬ。唯すすり泣きの音が忍びやかに聞える。

外の方には、遙に矢叫びの聲がする。戰ふものは誰ぞ、伊勢三郎か、龜井六郎か、片岡、駿河、鷲尾か、辨慶奮然と立ち上る。

「武藏が最後の働き致して、平泉の腰拔けどもに末代の語り草と致させてくれませう。さらば我君御免、之が今生の御暇乞におざりまする。」

（二）

伊勢三郎、片岡八郎たち六七人は今日を最後の合戰と心に決め、遣戸格子を楯に散々射る。鷲尾三郎、龜井六郎、駿河次郎は大門をさつと開かせ業物打振り、馬に跨り、雲霞と簇る敵の中におめいて入る。（後略）

（三）

九郎判官義經は小櫻縅の鎧に黃金の龍頭をつけたる冑を着け、弓杖ついて月見御所の椽に出で征矢三つ四つ敵に射かけ、騎馬武者二三騎射て落す。此時髮を大童に取亂し血汐にまぶれて駈け來るものがある、近づけば之なん片岡八

郎判官の前に跪き、「合戰も今が最後と見えまする。今生にて今一度君に拜顏致したさに棄つべき命を存へて推參いたしました。伊勢三郎、鷲尾三郎の兩人の行方は能うも知れませねども、之も討死致したることかと察しまする。其他の御内人は皆々勇ましい最後を遂げました。武藏坊は大太刀を車輪の如くに廻して敵軍中に躍り入り、名乘りを上げて散々に切り靡き衣川のほとりにて長刀杖に立ちはだかり、叡山西塔に育ちたる武藏坊辨慶が舞を見よ、蝦夷の奴原が孫子の語草にせよと瀧の水日は照るとも絶えずとふたり、とふとふたりと舞ひました、もう舞がすんだかゝれかゝれ、蝦夷どもの冑を首諸共に衣川に流してくれうと、切靡きましたる、其働きのすさまじさ、見る目も面白ふおざつたれど、射かけた矢は蝟の如く其儘衣川に立ながらの最後、天晴なる討死でおざいました。某は亂軍の中を切靡いて此まで參りましたが、よき敵と引組み刺し違へて死なん所存、一足お先に三途の川にてお待ち仕りませうぞ、武藏坊以下の面々、さぞや待ち居ることにておざりませう。三途の川は山伏姿でなうとも、威張つて通られますかと存じまするさらば我君、おさらばでおざりまする。」

と語るも息苦しげに見える。判官目禮し

「火が揚らば義經の最後と思へよ。」

片岡八郎の跡見送つて默然たることしばし

「兼房居やるか。」

「はつ。」

と畏つたるは、白髮頭の增尾十郎權頭兼房。

「義經まつた北の方の介錯は汝に賴うだぞ。」

北の方と姫君とを具して判官は持佛堂に入り、心徐に冑と甲を脫ぐ。（中略）

一團の黑煙は持佛堂から渦を捲いて噴き出る。つゞいて紅の火炎が迸しる、火の粉は流星の如く降り注ぐ、梁の落ちる音、柱の倒れる響、火は持佛堂から月見御所に吹きつける、一面に紅蓮の海、炎の浪。

其炎の裡に屹然立ちたる判官の顏は。火に輝いて、又なく勇ましく、凛々しく、神々しく、悲壯なるものであつた。

（四）

持佛堂から月見御所、高館一廓を燃し盡して、さしも凄じかつた勃火も消えたが、判官の亡き骸はそれと求むるに由なかつた。あらぬものゝ首級を判官と作りなし、美酒に浸して之を鎌倉に送つた。和田太郎義盛、梶原平三郎景時は首實驗として腰越に立越えたが、四十餘日を經たる今日、固より判官か否かを確むるに由なかつた。（中略）

榮えたるものは衰へ、驕りたるものは亡べるなかに、九郎判官のまことの行衛のみは疑の雲に鎖されて居る。高館で死んで高館に死なぬ。或時は三陬岬の波風激しい岩の上に現れ、或時は蝦夷の渡島に入りて、星明き夜を土人の苫屋に過す。義經神社となつて尊敬の念も淺からず、判官館となつて今に昔の語草を傳へる。夢か幻か、あるかなきか、人ならば高館でまことに死なう。靈ならば渡島に活きやう。

平泉が滅亡して、泰衡の一族郎黨の北に逐電したるものも多くあつた、南部青森より、遠くは渡島に入つたものさへ少なからずあつたであらう。判官戀し懐しいと思ふものもあつた。判官の威名を利用したものもあつた。自ら判官とさへ名乘つたものもあつたらう。

伊勢三郎さへも伊勢に還つて鈴鹿で自害したとも傳へられる。判官が高館に死なぬと言ふのも强らに惜しいとばかりの人情でもあるまい。雲は、なくして行き、水は晝夜を合分ずして流れる。判官は高館に死んで高館に活きた、死んだ義經は半ば小説の歴史である。活きた義經は全くの小説である。

平泉村一關町間の舗裝は、昭和九、十兩年度に於て拾八萬圓をかけ、其の三分の二を執行濟であるが、あとの三分の一がマヽならぬ現狀では、地元民も些か寢覺めが惡からう。幾に陳情團を繰り出してゐる樣だが暫く辛抱さつしやい。

往古は盤井の里と稱した一關町は、縣の咽喉に當り、商業殷盛を極むる縣南隨一の都邑であつて、坂上田村麿の末裔たる田村氏三萬石の治所であつた。天和二年以來二百三

十年連綿として明治の維新に及んでゐる。西方の一關公園は、安部貞任の弟磐井五郎家任の據りし高崎城址で、小松柵とも言ひ、釣山とも稱す。山頂の壘塹は當時を窺ふに難くない。尙公園下の楊貴姫櫻は紅雲鬘鬟として美觀を極め、願成寺本堂に安置せらるゝ秘佛藥師瑠璃光如來は、古來地方人の信仰殊の外篤い。

一關町から八粁西すれば嚴美溪がある。庭園式の溪谷美に過ぎないが、比較的道路が良いので行つて見る氣になる。「おのつから瀧のいはほにたゝみけり吉野の櫻まつしまの松」は相當心臟が强い。此處を右折すれば、其の昔盜賊高丸や惡路王の根城であつたと傳へられる達谷窟を經由して、平泉村に達するのであるが、此の府縣道を保勝道路と名附けてゐる。九代長官堤定次郎氏の大正三年五月に起工し、十代長官大津麟平氏の大正四年四月に竣功したものだ。工事費は參萬圓ぽつちに過ぎなくとも、二十數年前を顧れば。嗤ふべからずであらう。

岩手縣の資源の開發は、交通施設の不備、投下資本の寡少等の爲、長く放置の狀態にあつたが、近時東北振興の輿論高まり、東北興業株式會社、東北振興電力株式會社の二大國策會社の設置を見るや、事變下生産力擴充の線に沿ひ、縣下經濟界の各般に活況を呈し、東北セメント、ラサ工業、國産輕銀工業株式會社の新設は、躍進岩手に一大拍車となり、今や全國屈指の工業地を形成するの途上にあるのは邦家の爲萬歲である。然し乍ら、是等産業振興の原動力とも言ふべき、鐵道、道路、港灣等の發達は、他府縣に比し著しく遲々たるものあり。縣はこれを憂慮し、天然の良港大船渡港と後方內陸一帶とを連絡する鐵道を敷設せんとした。卽ち省線大船渡線盛驛より省線釜石線に連結する二十粁の岩手開發鐵道である。本地方鐵道の敷設は、本年六月七日免許を得たので、過般創立總會も開催の運びとなつた。厖大なる事業資金と會社資本金とは、其の鞏固さと堅實さを加へて賴母しい。鐵道の敷設は本年末着手し、昭和十七年三月竣功の計畫であるから、之が實現の曉には、大船渡港及釜石港を中心とする海岸線の情勢に、一大變化を齎すこ

とは火を見るよりも明かである。

海岸線第一の都市であり、天然の良港と海の寶庫を擁する釜石市は、明治の初年政府に於て製鐵事業を計畫して以來俄然膨脹し、昭和十二年市制を施行する隆盛に至つたが、嘗て明治十九年及昭和八年の大海嘯には全町覆滅の災禍を受け、精神的にも經濟的にも完全に叩きのめされ、再起不能を叫ばれたこともあつた。然し、白熱更生の意氣は遂に今日の大釜石市を築き上げた。大平洋岸に於ける產業經濟將亦交通上の中心地であり、縣內第一の活氣ある都市として將來の發展が約される。文明開化の象徵たる鐵道敷設は、東京橫濱間が第一番であるが、標高八百八十米の仙人峠を越えた釜石鑛山から、東海岸まで敷設された十六粁の鑛山鐵道が第二番目の歷史を有することは、新興釜石市の一つの誇りであらう。灣內の鎌崎、黑崎の二箇所には、寬政年間外船の出沒するもの多く、これが警備の爲藩主南部利敬、幕命を奉じて築いた臺場趾がある。風光壯大であるが廢址は殆ど面影を止めぬ。

嬉石女坂の頂上にある「石の證文」は、享保年間釜石の肝煎佐野忠兵衞が、嬉石村落が瀨海の一地帶に臨み、耕地に乏しきを深く同情し、彼の所有する山林田畑を無償提供して、一村共同の作業地たらしめた。村民は其の義俠と恩義に感泣し、每戶醵金して忠兵衞に贈り酬ひやうとしたが、忠兵衞固辭して「若し强ひて私に報謝せんとする意志あらば、今後正月、七月の各十六日を殺生禁斷の日と定め、一切の出漁を休止し、生類を憐むの功德を施されたい」と希つた。村民悅んで直に公約を定め、永久子孫に至るまで遵守すべきことを誓つた。そしてこれを不朽の石碑に刻み山上に建てたものと謂ふ。

內務省から榮轉以來、しばしの沈默を破つて、岩手縣開發の爲に萬丈の氣を吐く長官雪澤千代治氏の勇姿は、名刀の鞘を拂つて起つ偉丈夫の面影がある。岩手開發鐵道株式會社の發起人としての奮鬪は、直ちに免許の賜物となつて顯れたが、是からの活躍こそ、眞の開發であり、振興であらう。此の目的を達成するには、先ず道路の整備が焦眉の

問題である。此の好機に際し、單獨縣費を以て執行する道路工事の皆無であることは、何と言ふ悲哀であらう、亦日本一の大縣たるに拘らず、道路維持修繕費の少額であることは一入心細い。開發に注ぐ情熱の一端が、來年度の道路豫算面を如何に色彩るかゞ期待される。

經濟部長岩城悌氏及土木課長後藤久吉氏は、就任後日が淺いので其の切れ味は未知數だが、兩人共かなりの腕利きらしい。京都府に居た兩人が、相前後して盛岡入りをした奇緣を機とし、乾坤一番働いて貰ひたい。

大兵道路主事吉田政一郎氏は、長く不遇の人であつたが、群星を抜いて其の椅子に座つた幸運兒である。腹の出來た男だから將來を屬望してよからう。久しく沈滯せる土木の更生が君の双肩に懸ることを心して一路邁進されたい。

騰の高費生計

全國生計費指數

昭和十四年八月 大正三年七月基準 朝日新聞社調査

品目	7月	8月
飲食費		
總指數	209	212
米	207	209
麥其他	206	205
改良麥	267	265
食パン	184	184
ウドン	166	166
魚介類	283	313
鯛	220	282
鯖	153	174
鹽鮭	367	354
干鰯	392	442
肉類	244	245
牛肉	293	295
鷄肉	195	195
卵乳類	163	167
牛乳	174	175
鷄卵	153	159
蔬菜類	259	305
甘藷	293	362
馬鈴薯	240	244
大根	272	382
小豆	231	231
乾物類	236	240
昆布	270	276
海苔	201	205
豆腐漬物類	239	240
豆腐	237	287
蒟蒻	230	230
澤庵	201	204
調味料類	171	173
醬油	165	165
味噌	227	227
鰹節	168	173
砂糖	125	125
酒類	214	199
清酒	255	225
麥酒	173	173
煙草	193	193
朝日	225	225
パット	160	160
菓子果物類	168	148
煎餅	172	172
ビスケット	129	129
林檎	253	178
バナナ	120	114
飲料	190	195
茶	210	218
サイダー	171	171
住居費		
總指數	235	235
家賃	236	236
修繕費	284	296
畳表	299	310
大工賃	269	281
什器	200	201
茶碗	173	174

品目	7月	8月
光熱費		
バケツ	228	228
水道料	138	138
燃料費		
薪炭類	243	244
薪	311	311
木炭	262	271
石炭	370	360
瓦斯電燈	300	303
瓦斯料	106	106
電燈料	132	132
	80	80
被服費		
總指數	233	233
衣服類	240	240
洋服	222	222
ネル	399	399
銘仙	207	208
富士絹	189	183
モスリン	236	237
羅紗	262	263
打綿	250	252
セル	154	154
身廻品	224	222
下駄	251	253
足袋	209	209
靴	293	295
靴下	233	234
帽子	132	120
文化費		
總指數	202	202
保健衛生費	156	156
入浴料	243	243
理髮料	236	236
洗濯料	112	112
醫師藥價	146	146
藥局藥價	133	133
賣藥	91	91
石鹼	101	101
白粉	188	188
育兒教育費	261	262
半紙	289	295
罫用紙	229	229
鉛筆	210	210
玩具	373	373
授業料	204	204
交通費	149	149
電車賃	138	138
汽車賃	160	160
娯樂修養費	348	348
新聞代	289	289
雜誌代	400	400
キネマ料	354	354
全國生計費總指數	220	221
騰落百分率	(+) 0.9	(+) 0.7